

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 KUHN Michelle Louise

論 文 題 目

シカゴ美術館の起源と所蔵和古書

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	大井田 晴彦
委員	名古屋大学教授	塩村 耕
委員	名古屋大学教授	藤木 秀朗

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、多くの和古書を蔵するシカゴ美術館の創設に至る経緯をたどり、かつ所蔵される書籍について、書誌学的な分析と考察を行い、近世における王朝文学享受の実態を明らかにするとともに、その資料的価値について論ずるものである。全体の構成は、序章および全四章からなり、それぞれ英文訳を付している。第一章「万国博覧会における日本美術から—シカゴ美術館の起源」では、万国博覧会における日本の参加と出品の実態を精査し、シカゴ美術館が誕生する経緯を明らかにしている。1862年のロンドン万博以降、日本は積極的に万博に参加することになる。特に1893年のシカゴ万博は、それまでは機能性や実用性を重視する「応用芸術」「工芸」と見なされてきた日本の展示物が「美術」として認められるに至った、重要な歴史的意義を有するものであった。この博覧会のために建設された建物がシカゴ美術館となるのであり、野村正治郎の顧客であったM.A.ライアンとL.N.ブラウンの蒐集した膨大な日本関係の書籍が収められることになったのである。第二章「シカゴ美術館蔵三十六歌仙版本について」では、嵯峨本（青色表紙本・茶色表紙本）・『歌仙大和抄』（元禄七年版・元禄九年版）・北村季吟『六六私抄』・勝川春章『三十六歌仙』・喜多武清『三十六歌仙歌集』の計七種類の三十六歌仙版本について書誌を検討し直し、諸本の関係、和歌選択や画像の特徴について論じる。従来、菱川師宣『三十六歌仙』とされてきた本は実は『歌仙大和抄』が正しく、また著者・書名とも不明とされてきた版本が、季吟『六六私抄』であったことも明らかになった。小野小町の画像の特色と和歌選択から、諸本の関係についても論じた。第三章「江戸雛形本に現れる『百人一首』の女流歌人」は、小袖の文様を集めた雛形本の中でも、百人一首を題材とした版本を中心に採り上げ、その書誌を検討した。さらに、小野小町・和泉式部・小式部内侍・式子内親王らの女流歌人と和歌を図案化したものを分析し、その特徴について論じた。特に『源氏ひいながた』では、『鸚鵡小町』『東北』など、他の雛形本とは異なる謡曲を踏まえた図案と文章が見られ、独自なものとなっている。第四章「『源氏ひいながた』における中古文学の享受」では、『源氏物語』の女君たちを図案化した雛形本『源氏ひいながた』から、特に重要な明石君と若紫について、その意匠の表現について論じた。若紫における「杜若」や、明石君における「忍草」「岩漏る水」など、『源氏物語』本文には見られない景物を新たに付け加えて描くところに雛形本独自の物語解釈が認められる。また、明石君の図柄は、明石君ならず源氏（忍草）・紫上（桜）の存在も暗示的に描き込まれており、彼らの三角関係が巧みに表現されていることが明らかになった。

本論文では、シカゴ美術館所蔵の膨大な和古書のごく一部を採り上げるにとどまったが、当館は重要な資料の宝庫であり、今後も丹念な調査を続けてゆく必要がある。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

シカゴ美術館には1700冊を超える貴重な和古書が所蔵されているが、まだデジタル・データベース化はなされておらず、その全容は具体的に明らかになってはいない。本論文は、シカゴ美術館蔵の和古書の中でも、三十六歌仙や『百人一首』、『源氏物語』などに関する版本で、稀少かつ貴重なものを採り上げ、書誌情報を再検討し、また本文や挿絵の精緻な分析・解釈を通して、近世における王朝文学の享受の実態を明らかにしようとしている。第一章では、シカゴ美術館の沿革について、万国博覧会への日本の出品状況と関連づけながら論じている。1893年のシカゴ万博でようやく「応用芸術」「工芸」ではない「美術」として評価される経緯を、諸資料を博捜することで明らかにしている。シカゴ美術館にM.A.ライアソンとL.N.ブラウンの多くの蔵書が寄贈された背景には、二人を顧客としていた野村正治郎が大きな役割を果たしていたことも明らかとなった。第二章では、シカゴ美術館蔵の計七種の三十六歌仙本について書誌情報を再検討し、本文や画像の分析を試みている。申請者の書誌調査によれば、青色表紙嵯峨本は初版でなく再版であり、従来、菱川師宣『三十六歌仙』とされてきた版本は『歌仙大和抄』が正しく、著者・書名も不明であった版本は季吟の『六六私抄』であったことが判明した。このように、従来 of 書誌のいくつもの誤りを訂正したことは、今後の研究に益するところが大きい。第三章では、江戸時代の小袖雛形本に見られる、有名な女流歌人たちの本文と文様について解釈を示している。『源氏ひいながた』の小町や和泉式部に関して、あまり取り上げられることのない謡曲『鸚鵡小町』や『東北』が典拠となっていることを指摘したことは大きな成果である。第四章では、『源氏物語』の多くの女性を題材とする『源氏ひいながた』から、明石君と若紫、そして紫式部を取り上げて論じている。この雛形本が独自の解釈によって、物語本文には見えない景物を描き、また源氏・紫上・明石君の三角関係を象徴的に、巧みに表現しているという指摘は極めて重要で、説得力がある。本論文は、堅実な書誌調査を踏まえ、かつ本文と画像の表現と意味を鮮やかに読み解いたものとして高く評価できる。文学と美術史の領域を横断する学際的研究としての意義も認められる。しかしながら、いくつかの瑕疵もないわけではない。第一章では、「応用芸術」「工芸」といった用語の定義がやや曖昧である。イギリスにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の動向と、日本への影響なども視野に入れる必要がある。また、第三章・第四章では、雛形本の作成にはかなりの教養を有する人物の関与が想定されるが、そうした制作の実態により具体的に踏み込んで考察すべきである。『源氏ひいながた』では、明石君・若紫・紫式部のみを取り上げているのも不十分な印象がある。こうした今後の課題はあるが、本論文の価値を損ねるものではない。以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。